福岡市埋蔵文化財調査報告書第882集

# 周船寺遺跡　6

－周船寺遺跡群第16次調査－

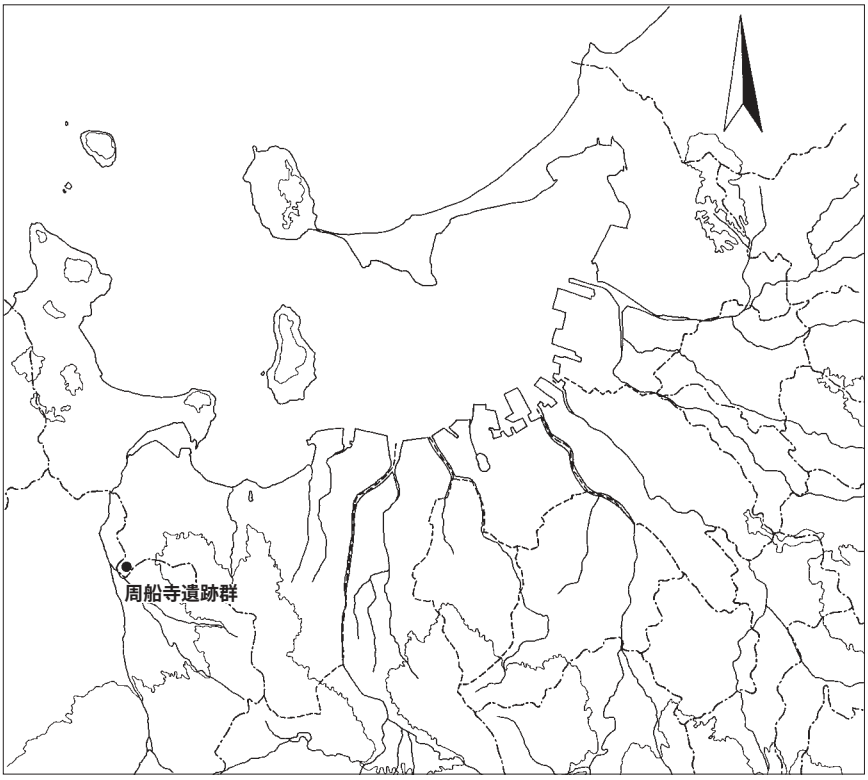
２００６

福岡市教育委員会

# 周船寺遺跡　6

－周船寺遺跡群第16次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第882集




遺跡略号　調査番号
SSJ-16　0431

２００６
福 岡 市 教 育 委 員 会

# 序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。糸島地域は「魏志倭人伝」にその名がみられる伊都国が存在した地域とされ、弥生時代の大規模な集落遺跡が多数みられます。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、個人住宅建築に伴い調査を実施した周船寺遺跡群第16次調査の内容について報告するものです。今回の調査では弥生時代前期末および中期後半頃の甕棺墓を検出するとともに、多数の縄文土器・石器が出土しました。これらは古代の糸島地域の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで多くのご協力を賜りました惟永寛子様をはじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　植木　とみ子

# 例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が個人住宅建築に伴い、福岡市西区大字千里447-4において実施した発掘調査である周船寺遺跡群第16次調査の報告書である。

2．本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

| 調査番号 | 遺跡略号 | 調査面積 | 調査期間 |
|---|---|---|---|
| ０４３１ | SSJ-16 | 97.0㎡ | 2004.6.25～2004.7.30 |

3．本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。

4．本書に掲載した遺物実測図は阿部が作成した。

5．本書に掲載した挿図の製図は阿部が作成した。

6．本書に掲載した写真は、阿部が撮影した。

7．本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より6°40′西偏する。

8．遺構の呼称は土壙をSK、甕棺墓をST、ピットをSPと略称する。

9．本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

10．本書の執筆・編集は阿部が行った。

11．甕棺出土の歯については、部位の確定、年齢等の所見を九州大学大学院教授　比較社会文化研究院　基層構造講座（自然人類学）　医学博士　中橋孝博先生に依頼し、貴重なご助言・ご教示を賜った。紙面ではありますがここに記して謝意を表します。

# 本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
　　１．調査に至る経過 …… 1
　　２．調査組織 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第３章　調査の記録 …… 5
　　１．調査概要 …… 5
　　２．遺構と遺物 …… 6
　　①土壙（SK） …… 6
　　②甕棺墓（ST） …… 6
　　③その他の出土遺物 …… 11
　　④小結 …… 12

# 挿　図　目　次

Fig. 1　周船寺遺跡群と周辺の遺跡（1/25,000） …… 3
Fig. 2　調査区位置図（1/1,000） …… 4
Fig. 3　調査区全体図（1/100） …… 5
Fig. 4　調査区北壁土層断面実測図（1/80） …… 5
Fig. 5　SK05および出土石器実測図（1/20・1/3） …… 6
Fig. 6　ST01・02・03・04・05・06実測図（1/20） …… 7
Fig. 7　ST01・02・03・05出土甕棺実測図（1/8） …… 8
Fig. 8　ST04・06出土甕棺実測図（1/8） …… 9
Fig. 9　ST02出土石斧未製品実測図（1/3） …… 9
Fig.10　16次調査出土石器実測図①（1/3） …… 10
Fig.11　16次調査出土石器実測図②（1/1） …… 10
Fig.12　16次調査出土縄文土器実測図（1/3） …… 11

# 表　目　次

Tab. 1　周船寺遺跡群第16次調査出土歯一覧表 …… 12

# 図　版　目　次

PL.1　1．調査区東部全景（西より）
2．調査区中央部全景（南より）
3．調査区西部（第1面）全景（東より）

PL.2　1．調査区西部（第2面）全景（東より）
2．ST01（南より）
3．ST02（南より）

PL.3　1．ST03（北より）
2．ST04（東より）
3．ST05（北より）

PL.4　1．ST06（北より）
2．SK05（東より）
3．ST05人骨出土状況（東より）

# 第1章　はじめに

## １．調査に至る経過

2004（平成16）年５月10日付で惟永寛子氏より本市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課）宛に西区大字千里447-4番地（面積：178.52㎡）における個人専用住宅建築に伴う埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けて埋文課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である周船寺遺跡群に含まれていることを確認し、当該地で平成16年６月３日に試掘調査を実施した。この試掘調査において埋甕の断面と思われる遺構が検出された。この成果を元に両者で協議を行ったところ、建築予定の住居は全体に地下室が伴う構造であり、建築工事によって遺構の破壊を免れないため、住居部分について本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、2004年６月25日から発掘調査、翌2005年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

## ２．調査組織

**調査委託**：惟永寛子
**調査主体**：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
**調査総括**：埋蔵文化財課長　山崎純男（前任）　　山口譲治（現任）
同課調査第1係長　田中壽夫（前任）　　山崎龍雄（現任）
**調査庶務**：文化財整備課　後藤泰子
**事前審査**：埋蔵文化財課事前審査係長　濱石哲也
同係主任文化財主事　吉留秀敏
同係文化財主事　本田浩二郎（前任）　　松浦一之介（現任）
**調査担当**：同課調査第1係　阿部泰之
**調査作業**：石川君子　田原忠昭　真田弘二　神原堅　野崎賢治　森下初美　西野光子
**整理作業**：窪田慧　黨早苗　松田順子　西島信枝　松尾真澄

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで惟永寛子様をはじめとして関係者の皆様には多大なご協力とご理解を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

# 第2章　位置と環境

現在の行政区では福岡市西区の西半分が含まれる糸島平野は、高祖山・飯場山・井原山など標高400～700mを測る山系に南を限られ、北は柑子岳・可也山・灘山などの山系で構成される糸島半島に面する平野である。糸島半島の東西の入り江である加布里湾・今津湾の間は古来湿地であったが、近世に入り大規模な干拓が実施され、現在では広大な水田地帯となっている。この糸島低湿地帯の北方には、前述の南を限る山系から派生する扇状地が形成され、遺跡は主にこの扇状地上に広がっている。

今回報告する周船寺遺跡群はこの糸島扇状地の末端部、糸島平野の東端部に位置する。

周船寺遺跡群の周辺にも大規模な遺跡は多い。南方の扇状地上には三雲・井原遺跡群が位置する。江戸時代に三雲南小路・井原鑓溝地区から多数の青銅器が発見されているのをはじめ、弥生前期には支石墓が作られ、弥生終末から古墳前期にかけては大規模な集落が形成され、当該期の拠点的な集落とされている。

東方の高祖山北麓には今宿古墳群が位置する。後期群集墳や前方後円墳の若八幡宮古墳・鋤崎古墳・山の鼻１号墳・今宿大塚・飯氏二塚古墳が、独立丘陵上や丘陵端部、山地の尾根上に分布する。

高祖山の西面には怡土城がある。城壁を山麓から山塊の尾根にたすき状に回したいわゆる朝鮮式山城で、吉備真備等により天平勝宝８年に築城を開始し神護景雲２年に完成したとされる。山麓から山腹にかけて土塁・城門・建物礎石などがみられる。

同じく高祖山には、戦国期の山城である高祖城がある。山頂部から中腹にかけて尾根筋に沿って郭が残り、城域は南北の堀切をもって区画される。山頂部の「上の城」は1998年に発掘調査が実施されている。この調査では郭を囲繞する石積み遺構・階段・礎石建物が検出され、大量の瓦が出土している。

これらの遺跡に囲まれた周船寺遺跡群では、現在に至るまで18次にわたる調査が実施されている。ここでは調査地周辺の調査事例に限り、概要を記す。

第８次調査は、今回の調査地が含まれる宅地の造成に伴い、生活道路部分を調査したものである。幅約５m・全長約110mの長大な調査区から、溝・土壙・ピット・甕棺墓・埋甕が検出された。甕棺墓は計９基検出され、中期後半頃の甕棺が出土している。

第11次調査は、16次調査区の南方20m、生活道路を挟んだ共同住宅部分で実施されている。溝状遺構・竪穴住居・土壙・貯蔵穴・甕棺墓が検出されている。甕棺墓は弥生前期末から中期初頭・中期後半の２時期に分かれる。これは16次調査の成果と近似するが、古い甕棺は前期末の範疇で収まるものと思われ、やや古い時期を示す。

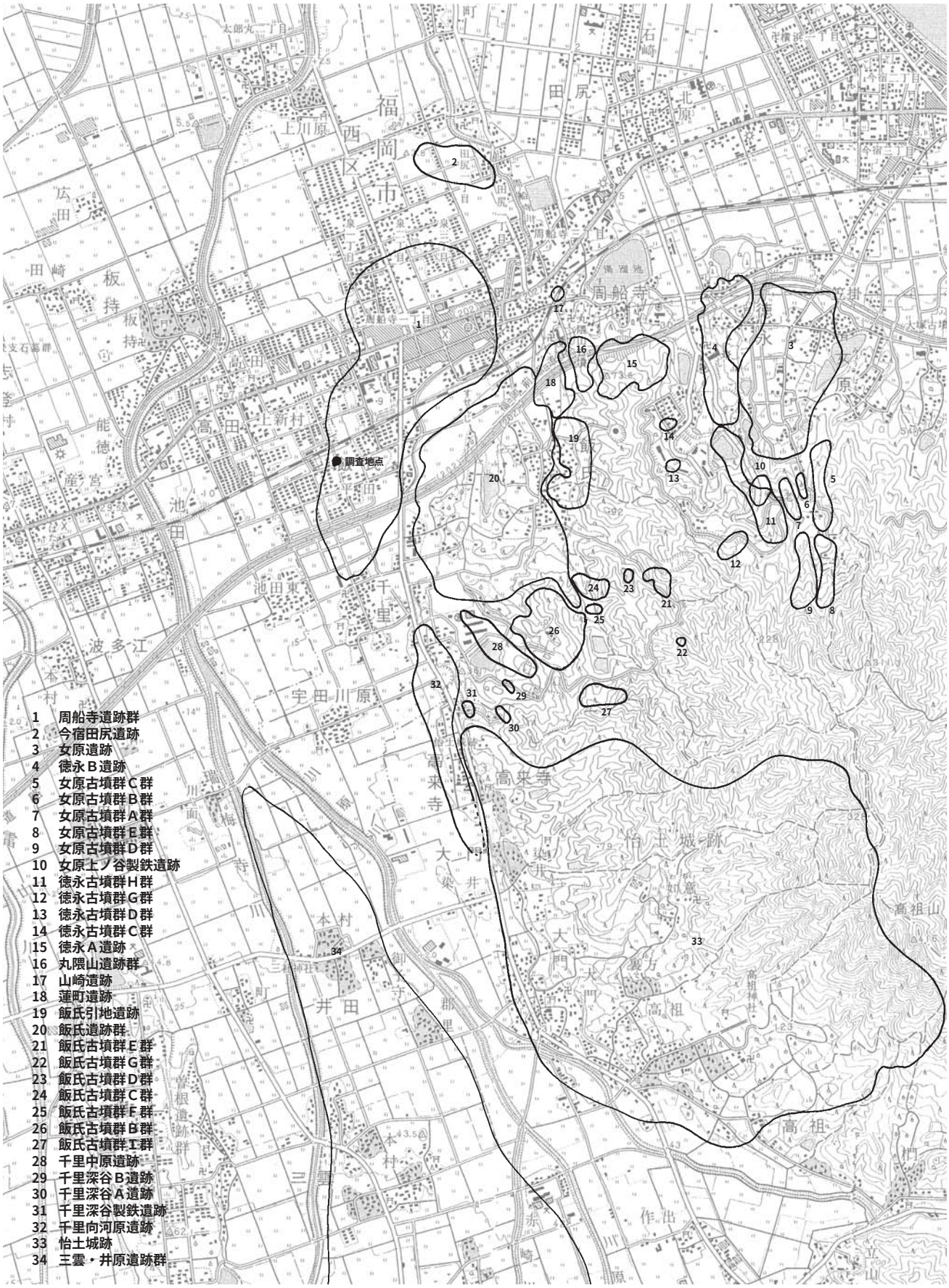



**Fig. 1　周船寺遺跡群と周辺の遺跡（1/25,000）**

**Fig. 2　調査区位置図（1/1,000）**

# 第3章　調査の記録

## １．調査概要

本調査区は、糸島平野の東部、周船寺川によって形成された沖積微高地上に位置する。今回の調査で検出された遺構は、甕棺墓６基・ピットである。６基の甕棺墓のうち５基について、時期は弥生時代前期後半とみられ、下甕に壺形土器、上甕に鉢形土器を用いる。他の１基は弥生時代中期に下るものである。いずれも小形棺である。ピットには柱痕を残すものがあり、柱穴と思われる。

また、甕棺をはじめとする遺構が検出された面は縄文土器の包含層となっており、下層に遺構の存在を想定して調査を行ったが、確実に弥生時代をさかのぼる遺構は検出できなかった。

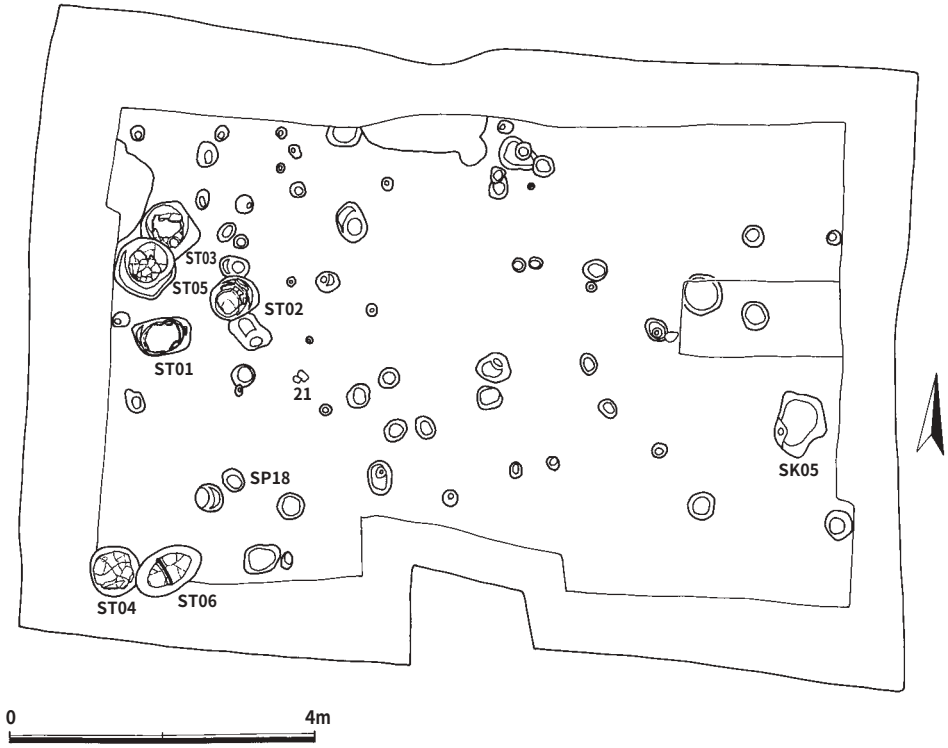



**Fig. 3　調査区全体図（1/100）**

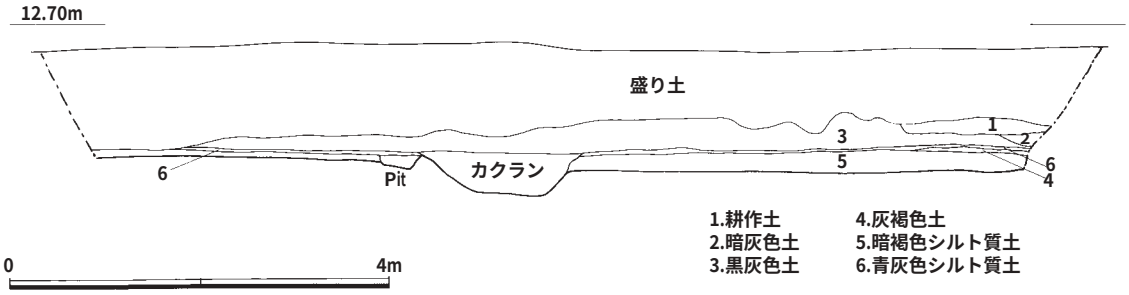



**Fig. 4　調査区北壁土層断面実測図（1/80）**

## ２．遺構と遺物

### ①土壙（SK）

**SK05**（Fig. 5 ・PL.4-2）

調査区東端部にて検出した。不整な楕円形を呈する土壙で、長軸を南北方向に向ける。長軸方向で0.95m、短軸方向で0.65mを測る。底面はほぼ平坦であるが、西壁中央付近に一部ピット状のくぼみを有する。精査を繰り返したが切り合いは認められなかった。そのため一つの土壙として報告する。深さは0.1mに満たない浅い土壙である。

出土遺物（Fig. 5）

１は、擦石である。径9.0cmの円礫の縁辺部を使用しており、ほぼ全周にわたり擦痕が観察される。中央部には打痕が観察され、叩き石としても使用されている。重量は500gを測る。

SK05からは、このほか縄文土器細片が出土している。

### ②甕棺墓（ST）

**ST01**（Fig. 6 ・PL.2-2）

調査区西部にて検出した。上部を削平のため失われた甕棺墓である。検出時には内部にマサ土を充填してあり、試掘調査の際に甕棺保護のため入れられたものの可能性がある。主軸を北東-南西方向にとる覆口式の甕棺である。上甕に鉢形土器・下甕に壺形土器を用い、上甕と墓壙底面の間に角礫をはさみ、甕がずれないようにしている。下甕は墓壙底面に接する部分に焼成後内面から穿孔を施している。孔と墓壙底面の間から、ST01とは接合しない土器片が出土している。埋置角は30°前後である。

出土遺物（Fig. 7）

２は、鉢形土器である。底部を失うが、口径38.8cmに復元できる。胴部外面はヘラミガキ、口縁部外面に斜め方向のハケメが観察される。胎土は精良で、焼成は良好である。３は、壺形土器である。復元口径29.6cm、器高51.4cm、胴部最大復元径44.6cmを測る。胴部に密なヘラミガキを施す。胎土は精良で、焼成は良好である。

**ST02**（Fig. 6 ・PL.2-3）

調査区西部にて検出した。上部を削平のため失われた甕棺墓である。検出時には内部にマサ土を充填してあり、試掘調査の際に甕棺保護のため入れられたものの可能性がある。主軸を北東-南西方向

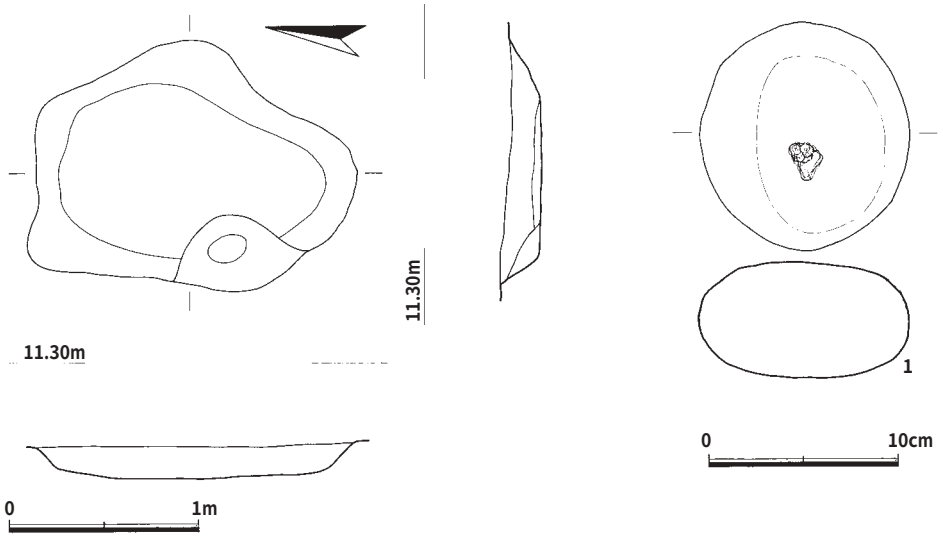



**Fig. 5　SK05および出土石器実測図（1/20・1/3）**

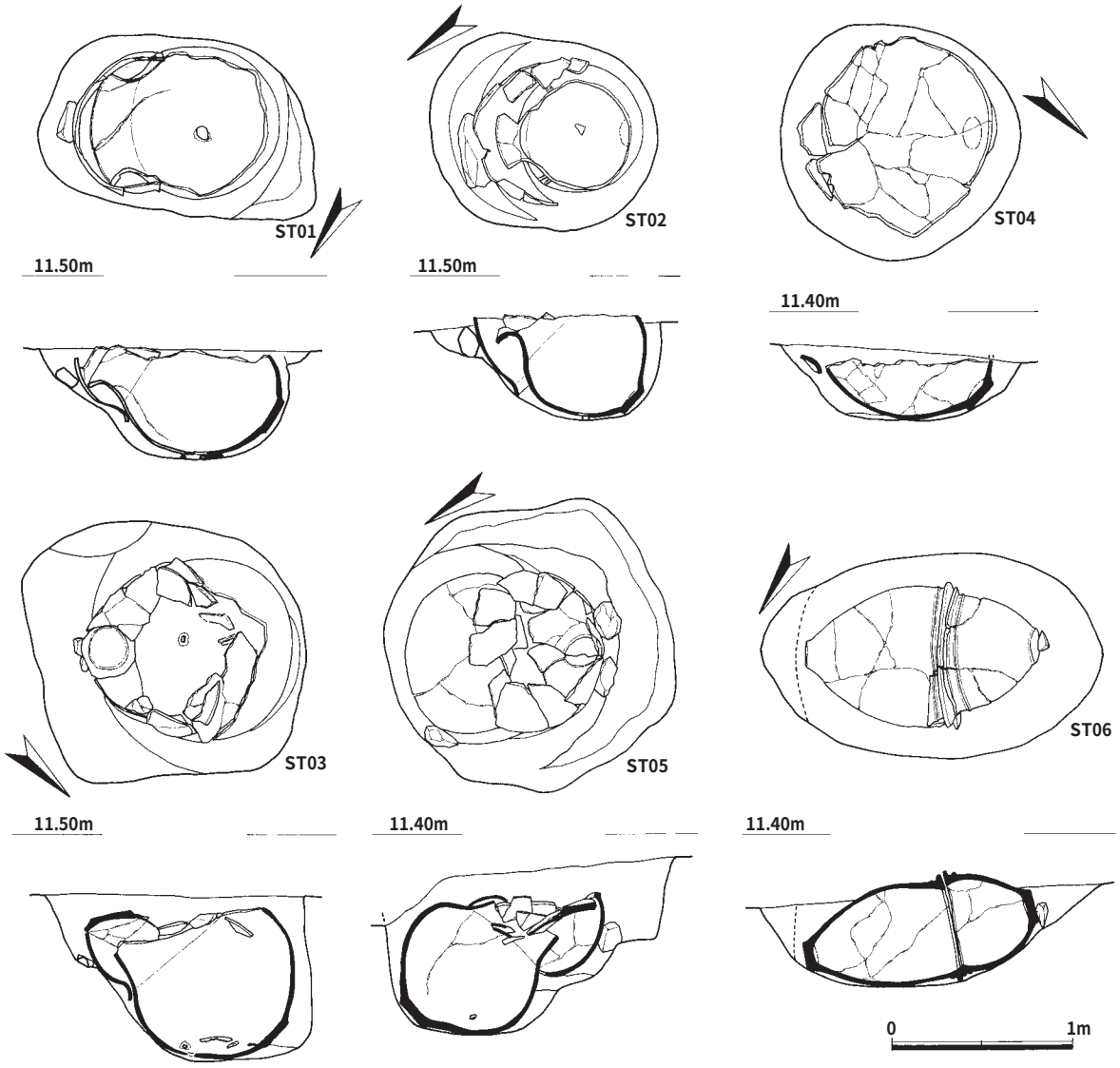



**Fig. 6　ST01・02・03・04・05・06実測図（1/20）**

にとる覆口式の甕棺である。上甕に鉢形土器・下甕に壺形土器を用い、上甕と墓壙底面の間に石斧未成品をはさみ、甕がずれないようにしている。下甕は墓壙底面に接する部分に焼成後内面から穿孔を施している。孔と墓壙底面の間から、ST02とは接合しない土器片が孔からわずかにずれた位置で出土している。埋置角は40°前後である。墓壙は上甕が乗る部分にテラスを設けた不整円形を呈する。

出土遺物（Fig. 7）

４は、鉢形土器である。底部を失うが、口径31.6cmに復元できる。胴部外面はヘラミガキ、内面にはユビナデの痕跡が観察される。胎土は精良で、焼成は良好である。５は、壺形土器である。復元口径22.6cm、器高42.8cm、胴部最大復元径37.2cmを測る。器壁は磨滅するが、肩部に３条の沈線、胴部にハケメをヘラミガキで消した痕跡が観察される。胎土は精良で、焼成は良好である。６（Fig. 9）は、石斧未成品である。玄武岩質の石材で、縁辺部を打撃し形状を調整した痕跡が観察される。長軸で20.1cm、最大幅10.1cmを測る。

**ST03**（Fig. 6 ・PL.3-1）

調査区西部にて検出した。上部を削平のため失われた甕棺墓である。主軸を北西－南東方向にとる

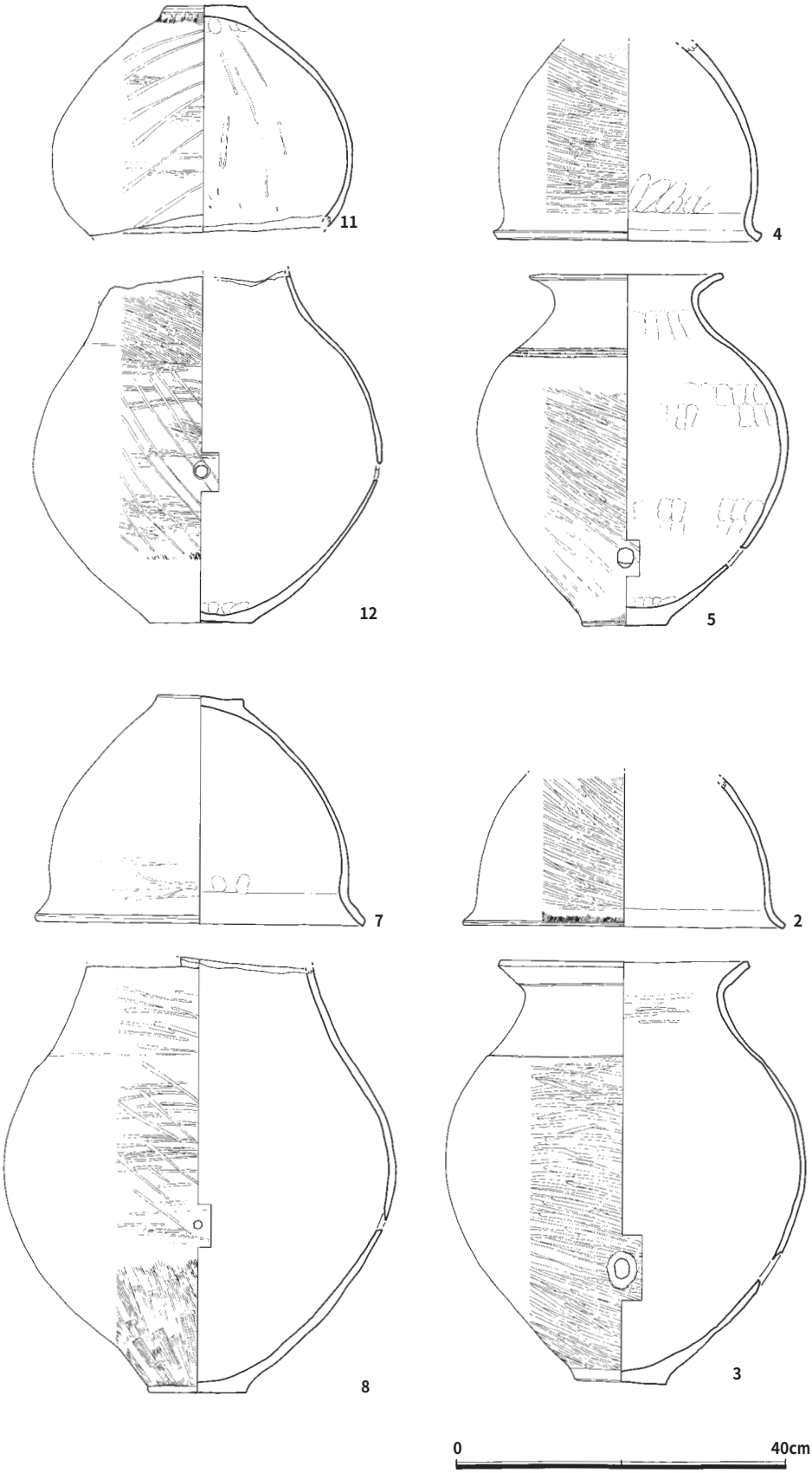



**Fig. 7　ST01・02・03・05出土甕棺実測図（1/8）**

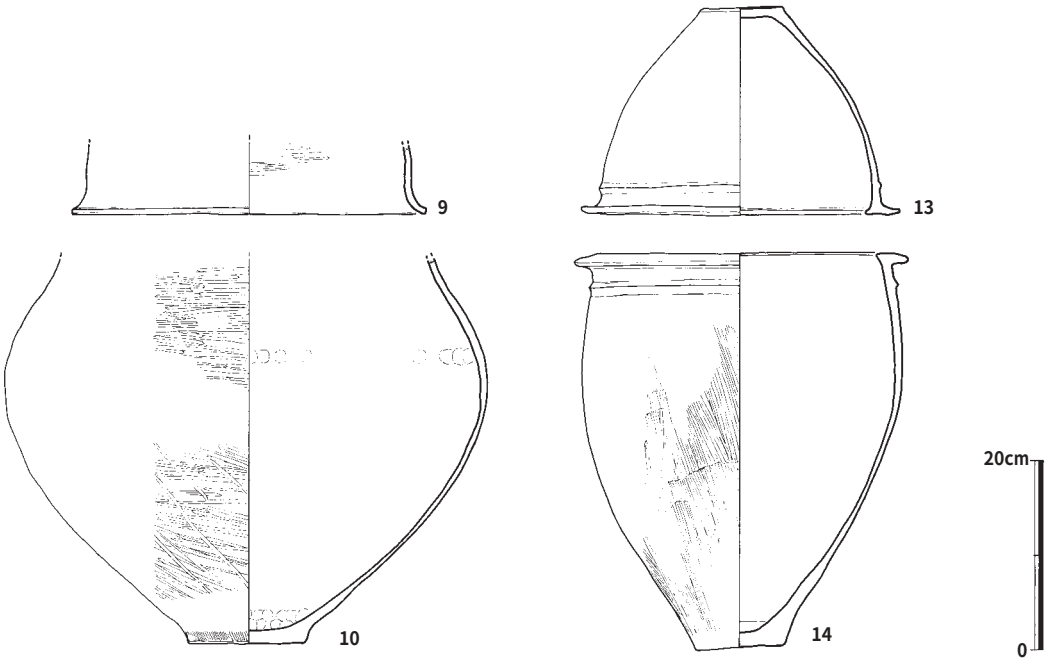



**Fig. 8　ST04・06出土甕棺実測図（1/8）**

覆口式の甕棺である。上甕に鉢形土器・下甕に口縁部を打ち欠いた壺形土器を用い、上甕と墓壙底面の間に小礫２個をはさみ、甕がずれないようにしている。下甕は墓壙底面に接する部分に焼成後外面から穿孔を施している。孔と墓壙底面の間から、ST03とは接合しない土器片が孔からわずかにずれた位置で出土している。埋置角は40°前後である。下甕内部、底面に近い部分から人骨が出土したが、劣化が激しく取り上げは不可能だった。内部の埋土を水洗したところ、歯が5個体出土した（Tab. 1）。墓壙の平面形は不整円形を呈する。

出土遺物（Fig. 7）

７は、鉢形土器である。全体の1/2を欠損するが、口径40.4cm、器高28.7cmを測る。器壁は磨滅するが、胴部外面にヘラミガキの痕跡が観察される。胎土は精良で、焼成は良好である。８は、壺形土器である。口縁部を打ち欠かれる以外はほぼ完形で、残存高51.7cm、胴部最大径48.4cm、底径11.8cmを測る。器壁は磨滅するが、肩部に１条の沈線、胴部にハケメをヘラミガキで消した痕跡が観察される。胎土は精良で焼成は良好である。

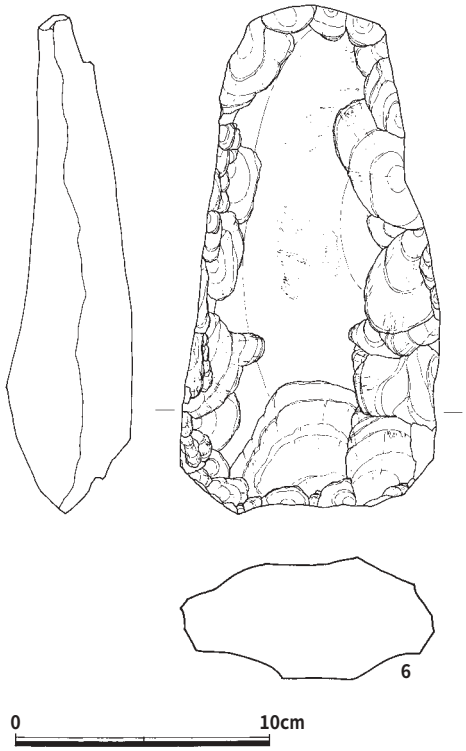



**Fig. 9　ST02出土石斧未成品実測図（1/3）**

**ST04**（Fig. 6・PL.3-2）

調査区西部にて検出した。大きく削平され、甕棺の底部を若干残す甕棺墓である。主軸を北西－南東方向にとり、上甕に鉢形土器、下甕に壺形土器を用いる。下甕に穿孔はない。埋置角は40°前後である。墓壙の残存部分は不整円形を呈する。

出土遺物（Fig. 8 ）

９は、鉢形土器である。口縁部の一部のみ残存する破片である。復元口径36.8cm、残存高7.3cmを測る。器壁は剥落するが、内面にヘラミガキの痕跡が観察される。胎土は精良で、焼成は良好である。10は、壺形土器である。底部から胴部の一部を残すのみで1/3個体程度残存する。残存高40.5cm、胴部最大復元径50.4cm、底径12.7cmを測る。頸部から上部を打ち欠いている可能性もあるが、現状では確認できない。器壁は磨滅するが、外面にヘラミガキが観察される。胎土は精良で焼成は良好である。

**ST05**（Fig. 6 ・PL.3-3）

調査区西部にて検出した。ST03を切り、主軸を北東-南西方向にとる覆口式の甕棺である。上甕・下甕とも壺形土器を用い、上甕で２個、下甕で1個、墓壙底面との間に角礫をはさみ、甕がずれないようにしている。上甕は頸部から上、下甕は口縁部を打ち欠いており、下甕は墓壙底面に接する部分に焼成後外面から穿孔を施している。下甕内部、底面に近い部分から人骨が出土したが、劣化が激しく取り上げは不可能だった。内部の埋土を水洗したところ、歯が３個体出土した（Tab. 1 ）。埋置角は40 ° 前後である。墓壙は不整円形で、甕棺が接する部分に階段状に３段のテラスを有する。

出土遺物（Fig. 7 ）

11・12は、壺形土器である。11は上甕で頸部から上以外はほぼ完全に復元できる。胴部径36.7cm、底径9.6cmを測る。胴部外面はハケメを消すヘラミガキ、内面には爪痕らしき三日月形の圧痕が観察される。胎土は精良で、焼成は良好である。12は下甕。口縁部を欠損するがそれ以外はほぼ完形で、胴部径42.2cm、底径6.5cmを測る。胴部外面にはヘラミガキを施す。胎土は精良で、焼成は良好である。

**ST06**（Fig. 6 ・PL.4-1）

調査区南西隅部にて検出した。ST04を切り、主軸を北東-南西方向にとる合口式の小形棺である。上甕・下甕とも甕を用い、上甕上部には墓壙底面との間に角礫をはさみ、甕がずれないように支えにし

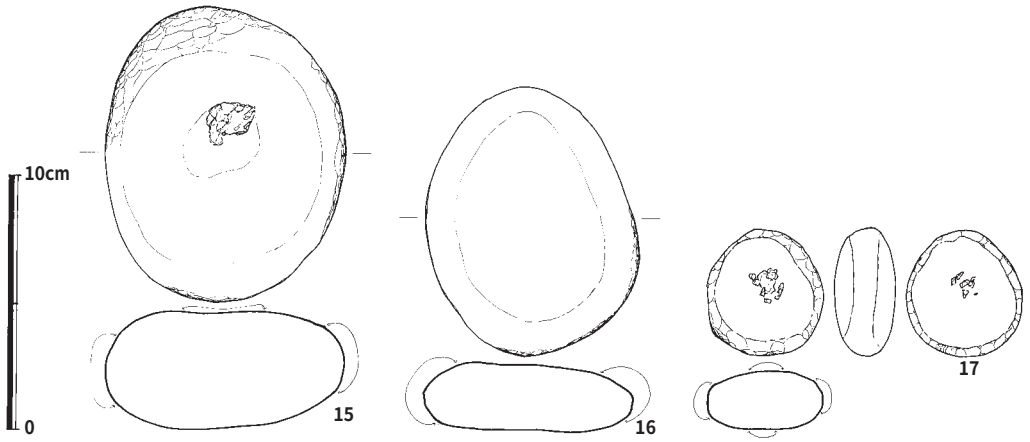



**Fig.10　16次調査出土石器実測図①（1/3）**

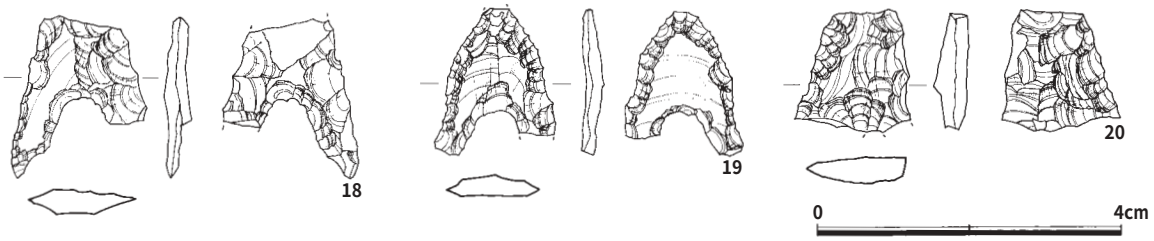



**Fig.11　16次調査出土石器実測図②（1/1）**

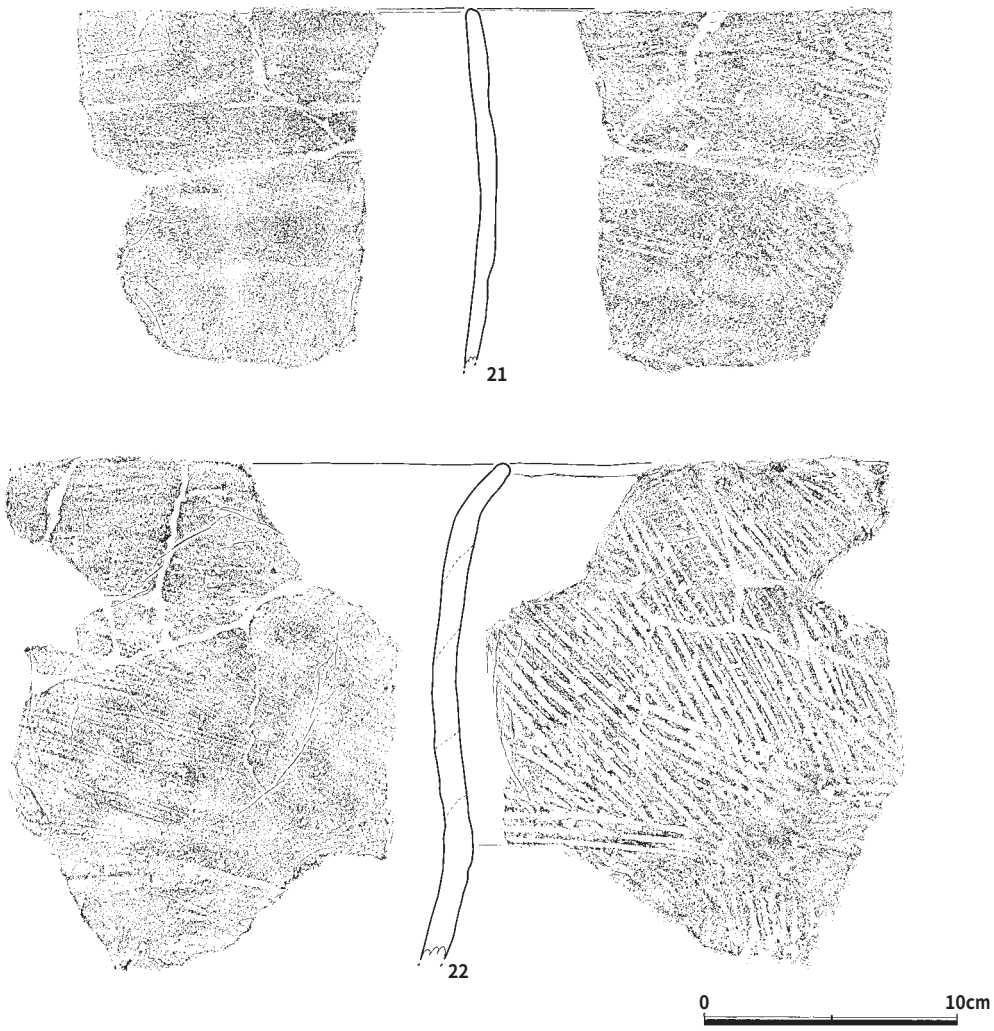



**Fig.12　16次調査出土縄文土器実測図（1/3）**

ている。下甕に穿孔はない。被覆粘土は検出されなかった。埋置角は10°前後である。墓壙は北東部分を一部掘りすぎたが、略楕円形を呈する。

出土遺物（Fig.８）

13・14は、甕である。13は上甕でほぼ完形である。口径33.6cm、器高21.9cmを測る。器壁は剥落し調整は不明である。14は下甕。口縁部を一部打ち欠いているがそれ以外はほぼ完形で、口径29.0cm、器高46.9cm、底径8.6cmを測る。胴部外面にはハケメが施される。胎土は精良で、焼成は良好である。

**③その他の出土遺物**（Fig.10・11・12）

土壙・甕棺墓を検出した暗褐色シルト質土は縄文晩期頃の遺物包含層となっており、16次調査では当該期の遺物が少量ではあるが出土した。そのほかピット、表採を含めたところで主な遺物について以下の通り報告する。

15・16は、磨石である（Fig.10）。いずれも円礫の縁辺部に擦痕を有する。縁辺部の一部に打痕が観察され、叩石としても使用されている。15は砂岩質で、中央部に打痕を有する。784gを測る。16は花崗岩質。375gを測る。17は、叩石の可能性がある円礫である。石材は蛇紋岩質で、縁辺部および表裏の中央部に打痕を有する。90gを測る。

18・19・20は、打製石鏃である（Fig.11）。いずれも黒曜石製で、19は素材剥片の縁辺部を加工した剥片鏃である。18は表採、19はSP18、20は遺物包含層出土である。

21・22は、縄文土器である（Fig.12）。いずれも粗製深鉢の小片で、外面に条痕文が施される。内面はナデ調整。ともに遺構検出面から出土したものである。

**③小結**

今回の調査では、土壙・甕棺墓・ピットを検出した。全体に削平が激しく遺構の残りは悪い。遺物は、ピットから弥生土器・縄文土器が出土した。いずれも小片であり、量も少ない。甕棺墓は弥生前期末のいわゆる伯玄タイプが５基、中期後半頃の甕形土器を用いたものが１基検出された。土壙・ピットは遺物が少なく、詳しい時期はわからない。本調査区南および東隣接地で調査が行われており、特に第８次調査では今次調査出土の甕棺と時期が似る弥生前期末～中期初頭とされる甕棺墓が検出されている。８次調査の成果と併せ、今回の調査で得られた成果は、周船寺遺跡群における調査地周辺の様相を推し量る上での１資料となろう。

| 遺構 | 個体 | 名称 | 所見 |
|---|---|---|---|
| ST03 | T1 | 左下顎第１小臼歯 | 未成人で、幼児と思われる。正常な成長状態なら年齢５～６歳と推定される。 |
| | T2 | 左下顎側切歯 | |
| | T3 | 右下顎中切歯 | |
| | T4 | 左下顎中切歯 | |
| | T5 | 左下顎犬歯 | |
| ST05 | T1 | 左下顎第１大臼歯 | 乳歯の存在から、子供で幼児と思われる。年齢２～５歳と推定される。 |
| | T2 | 左下顎第２乳臼歯 | |
| | T3 | 右上顎第１大臼歯 | |

**Tab.１　周船寺遺跡群第16次調査出土歯一覧表**

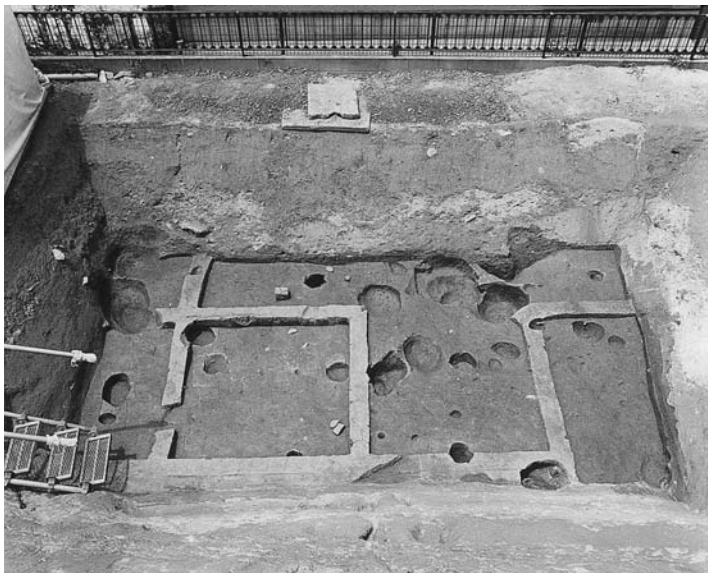
# 図　　版
# PLATES

1．調査区東部全景（西より）

2．調査区中央部全景（南より）

3．調査区西部（第１面）全景（東より）

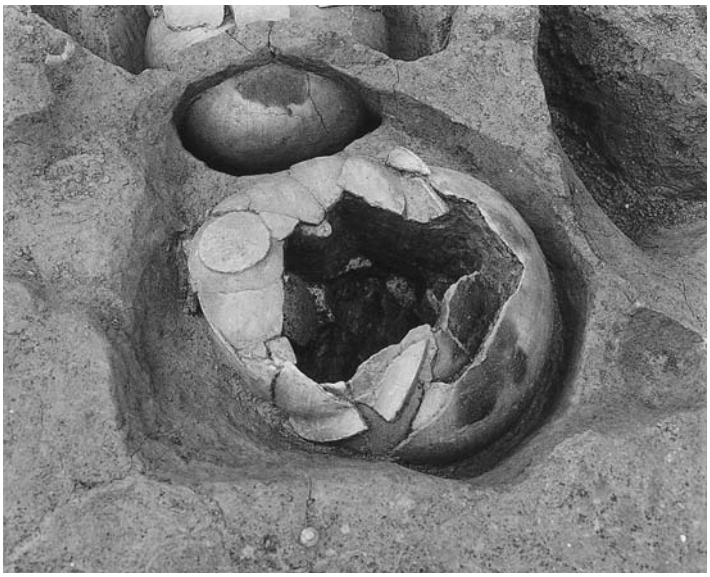
PL. 2



１．調査区西部（第２面）全景（東より）

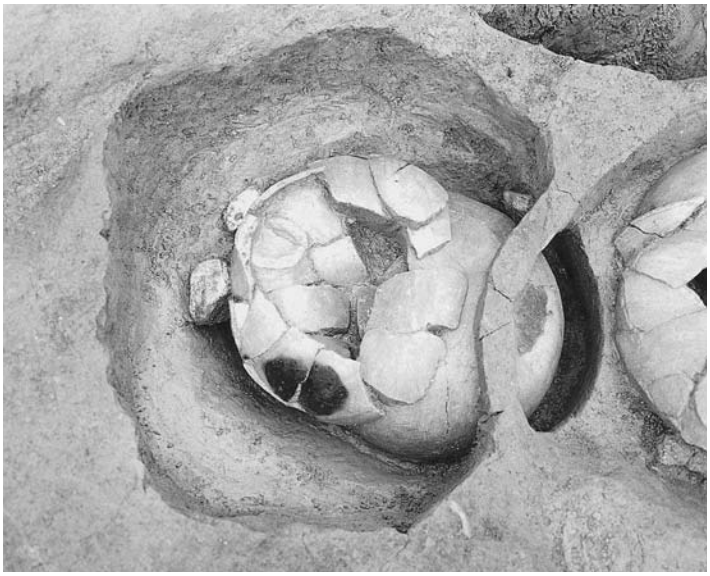
２．ST01（南より）

３．ST02（南より）



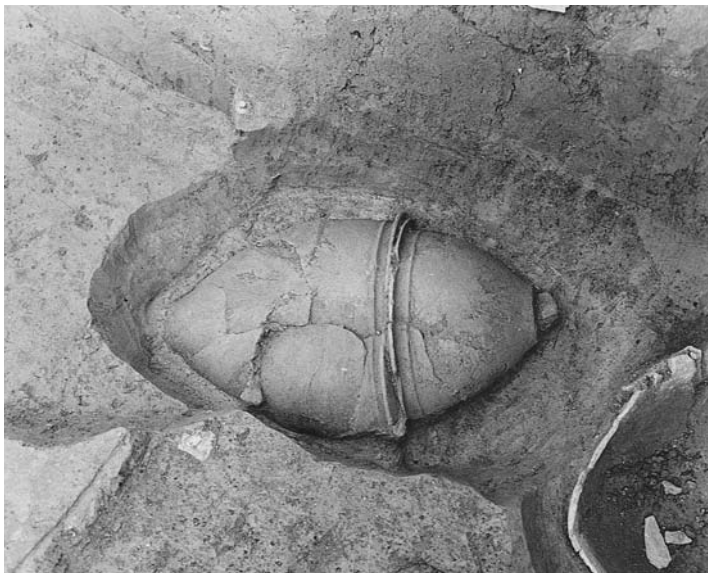
1．ST03（北より）

2．ST04（東より）



3．ST05（北より）

PL. 4



１．ST06（北より）

２．SK05（東より）

３．ST05人骨出土状況（東より）

報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | すせんじいせき |
| 書名 | 周船寺遺跡　６ |
| 副書名 | 周船寺遺跡群第16次調査 |
| 巻次 | ６ |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | ８８２ |
| 編著者名 | 阿部　泰之 |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 |
| 所在地 | 福岡市中央区天神１－８－１ |
| 発行年月日 | 2006年3月31日 |
| 調査期間 | 2004年6月25日～2004年7月30日 |
| 調査面積 | 97.0㎡ |
| 調査原因 | 個人住宅建築 |

| ふりがな | ふりがな | コード | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 |
| すせんじ<br>周船寺遺跡群 | 福岡県福岡市<br>西区大字千里447-4 | 40135 | | 33°33′57″ | 130°14′16″ |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 周船寺遺跡群 | 墓地／散布地 | 弥生／縄文 | 甕棺墓 | 弥生土器＋縄文土器＋磨石 | 前期末の甕棺が集中する |


周　船　寺　遺　跡　６

福岡市埋蔵文化財調査報告書第882集

平成18年3月31日

発　行　　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　　有限会社　西　菱
福岡市早良区次郎丸１丁目７番１号